

村野次郎創刊

香蘭



2023年(令和5年)9月号

第100卷

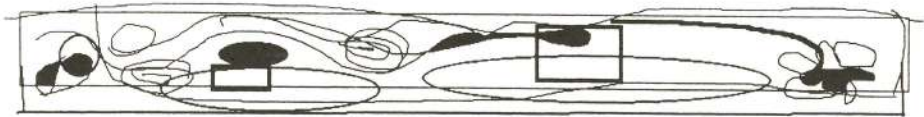
第9号

通卷1113号

二〇二三年(令和五年)九月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇〇卷第九号



香 蘭

2023年(令和5年)9月号
第100巻 第9号 通巻1113号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(97) 丑山真弓 : 表二
作 品 2

一 20
二 26
三 34

推薦香蘭集 34

香 蘭 集 35

作品一 十首選(七月号) 桜井 京子選 14

作品二・三 十首選(七月号) 高島 憲子選 16

一頁公論(28) 気配の縁 13

村野次郎への旅(161) 18

羊屋の回覧板(3) 父からの贈り物 25

私の読む現代短歌(21) 加藤克巳のモダニズム 38

エッセイ・自由研究 福島泰樹歌集 40

『百四十字、老いらくの歌』 40

魚 点(七月号) 時事への目を感じる歌 42

作 品 評(七月号) 作品一 44

作品二 46

作品三 48

香蘭集 50

七 首 抄(七月号) 52

耳言あれこれ(22) 53

緑 地 帯 54

岩田・近藤(純)・高島(崇) 58

明宝研究会第一四一回 六月例会 接続助詞「ば」について 62

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 66

歌会及び会合・会員消息・他 70

編集後記・新宿日記 表三

表紙絵 中村 陽子「春ひかる」 目次・緑地帯カット 和田 和雄

おそくまで車庫に居る孫自動車に

われの知らざる愛情をもつ

『村野次郎歌集』

『村野次郎三百首』より、この作品を選びました。

初めて村野次郎先生の歌集『樗風集』と『村野次郎三百首』の二冊を拝読させていただき、この膨大な作品から一首を選ぶ作業は、根気と決断の試練となりました。

この一首は、昭和四十六年、先生七十七歳の時の作品で、今の私の年齢に近く、先生の場合はお孫さんですが、私は息子に對しての思いに重なりました。

お孫さんの日常を詠まれたこの歌にはポジティブな、やさしく包み込むような愛情が、みごとに表現され、感動いたしました。

赤子や小動物（かたつむりなど）に對する細やかな観察眼と温かい心で詠まれている作品にも心惹かれました。

この機に、村野先生の数々の作品に出会えましたこと、心より感謝いたします。

〔短歌研究文庫『村野次郎歌集』12頁、『村野次郎三百首』102頁に掲載〕

四 選 者 の 作 品

嘘くさきもの

平 塚 千々和 久 幸

上衣脱ぎ青葉の下を急ぎ行くすこし頑固になれるわたしが
平成も令和も記憶淡ければ酔いて昭和の歌をうたえり
熱量の衰えるとき見えてくる真実どれも嘘臭きもの

無名にて終わるひと世もまたよけれ紛うかたなき父の血なれば
理屈ではほほ諒解をしておれど「ほほ」をこぼるるものにこだわる
世を拗ねるほどの気骨のあらざればプランターにペゴニアの花溢れさす
雨が降るたぶんあなたのヒールにも季節外れの冷たい雨が
自らの病を託ししことのなき妻なり死してのちに思えば

影動かすや

横 浜 渡 辺 礼比子

窓に立つ人は知らずや夕つ陽の祝福受くるガラス一枚
いじわるに聞こえぬように精一杯ことばを選び物申したり
夢にして帰らん帰らんと急くわれは毎夜いずこへ帰らんとする
春夕ベクリーニング屋に立ち寄れば女性ゆかしき言葉遣いす
賑わえるキャンプサイトの脇にあり窓枠錆びし第三海堡
公園に残る兵舎の格子窓うちがわに今し影動かすや

万両は木陰に紅き実を垂るるおそらく誰にも気づかれぬまま
さらさら歌のミューズは降臨せず トマトとゴーヤに水をやらんか

続・吟行

鎌倉 高 島 憲 子

初夏のしたたる緑の園を詠む百二十分を持ち時間とし
遅れたる歌友に電話を入れてみむ春待つといふ名の茶屋に来て
遅れたる人待ちをれば名物の三溪蕎麦はや運ばれて来る
昔むかし歌会のありし待春軒を出でむとすれば鉛筆忘る
人群れの次つぎ来るをやり過ごしひとり聴きをり溪流の音
茅葺の民家の板を踏みてゆくわが足裏がなつかしと言ふ
歌草をメモせるA四の一枚がリュックの中に紛れてしまふ
よく似たる門を間違へないようと言ひたるわれが帰路に間違ふ

ウタドリ

我孫子 丸 山 三枝子

人の名が思い出せない窓に来て鳴くウタドリよな鳴くな鳴くな
かすみゆく過去とそこより霞みいる未来の間の今日のおおぞら
地上より飛び立つときの囀りを彼岸へわたる声と聞ききたる
春蟬か蛙の声か聞きとれぬ耳に聞きおり生きて鳴くこえ
ああ君も生きていたかと蛍ぶくろ涼しく揺るる今年もここに
実をつける樹に寄り合える鶴ら徒党を組むということも無く
取手駅二番ホームを一心に歩く土鳩に励まされいる
街空にたなびく今日の茜雲にんげん関係棄てよと言うか

作品一 十首選



(七月号作品から)

桜井京子 選

・気をつけてお帰りください竹藪に犀が潜んでいるかも知れず

千々和久幸

帰りしなに、何気なく言われた「気をつけてお帰りください」。はて、何に気をつけるのかと考えた作者。転ばぬように、車に轆かれぬように、マンホールに落下しないように、あるいはスリやストーカーに遭わないようになど、この世は何が待っているか分からない。だから竹藪から犀が出て不思議ではない。だが、犀は見た目のいかつさとは違って、繁殖期以外は穏やかに暮らす草食動物で、絶滅に瀕した動物でもある。

この作者にとつて竹藪に潜んでいるのは犀でもカバでもよかった、とも言えよう。一寸先は闇、などと言えはありきたりになるが、とにかく、足元に気をつけて無事に家に帰り着いてもらいたい。

・起きてから寝につくまでを動きいる手足をほめて床につくなり

丸山三枝子

忙しい日常を送っている作者である。歌人としてはもとより、家庭では良き妻、母として大車輪の働きをする自身に対して、これは

自愛の歌であり、人生肯定の歌とも読める。今日一日お疲れ様と、手足の労をねぎらうところに作者の優しさがのぞく。

手足は勝手に動いているのではなく、脳からの指令によって動く。時にどんなに過酷な指令であっても、それに応じて懸命に動いてくれる。もしかしたら、明日はまた火中の栗を拾うかも知れぬ。そんな作者の覚悟を手足は知っているかどうか。ともあれ、手足をほめて「犬を洗って」今日はおしまい」の作者なのであった。

・外人さんが大型バスでやって来た鎌倉の良さ分かるだろうか

阿部 容子

コロナ禍に収束の気配が見え始めたことで、鎌倉にまた外国人観光客が戻ってきた。鎌倉は歴史ある神社仏閣や自然の美しさなどが、魅力ある観光地として紹介される一方、環境の悪化が懸念されている。作者も外国人観光客の到来を、手放して喜んでいるのではない。そもそもその土地の良さが短期間の滞在で理解できるものと思えず、観光とは本来そういったものなのだろう。訪れた外国人たちには鎌倉の素晴らしさに触れて、良い記憶を持ち帰ってほしいものだ。

・吾は吾夫は夫なりその夫が眼鏡探すにわが関わらず

飯島智恵子

眼鏡はある年齢から必需品になるが、作者は夫が困っているのに、見て見ぬふりをしている。どうせそのうちに、どこから出てくるだろうとタカをくくっているのだ。

欧米人の個人主義に対して日本人は和を尊ぶと言われるが、この作者は私的な雑事は夫と一線を画している。互いに支え合い、助け合って生きることと、依存しあうこととは違う。この適度な距離の取り方が、長年連れ添った夫婦円満の知恵でもある。吾は吾夫は

夫、されど仲良し」が、清々しく真似したくなる態度である。

・連休もへつたくれもないと言はれればへつたくれもない日常である

石井 雅子

「へつたくれ」とは「取るに足りないと思うものをのしつて言う語」（「広辞苑」とあり、これを言ったのは、現役世代の厳しい現実にとさらされている人であろう。「へつたくれもない」と吐き捨てるように言い放つて、留飲を下げたのだ。

連休さえも無関係に働く人がいる一方で、生産性の低い日常を送る身には忤怛たる思いもあるが、そこは長年、社会に貢献して来たことへのご褒美、お許し頂くこととしよう。

・満開の桜の下を猪が子をつれてゆく鳥のおぼる夜

岡野 甫江

昨今は人里に猪が出没すると聞かすが、作者の住む因島も例外ではないらしい。畑の作物を荒らすので害獣として迷惑がられる猪だが、この夜の構図はメルヘンのように美しい。猪も桜の花に誘われて親子で花見に出てきたものか。この光景は幻想的で、ひととき浮世の憂さを忘れさせる。さりげなく置かれた結句が秀逸である。

・ハチ公の傍えに逢いし数知れぬ人のその後は知らずともよし

工藤 溪子

東京の待ち合わせ場所と言えば、昔から渋谷ハチ公前が定番である。作者もかつてその場所で誰かと待ち合わせをしたのだろう。ハチ公前で待つ人は多く、相手を探し出すのが大変なほどの賑わいだ。多くの人が誰かと出会ってひとときの時間を共有し、その後のことは知る由もないが、ハチ公にお世話になったことは忘れていないだろう。時の流れとともに、渋谷の街に紛れていった人々の運命に

思いをはせた、心惹かれる歌である。

・ヌートバー客席にむけお辞儀するああなんという律儀さなりや

近藤 光子

先の ^{フューリー、ベイス、ムラサキ} W B C には日本中が熱狂したが、日本人の母を持つヌートバーの活躍も忘れ難い。陽気でひたむきなプレーにより、日本チームの勝利に貢献したヌートバー。お辞儀は母の祖国へのリスペクトか。多くの日本人の心をつかんだ彼の態度に、作者も心打たれたのだった。感動の記録として残したい一首である。

・芍薬の蕾をほどき雨が降る四月が恋する五月のために

中村かよ子

初夏に大輪の花を咲かせる芍薬。雨が開花をうながすように降りそそぎ、花ひらく日への期待が膨らむ。四月から五月という季節の高揚感、命の進りを思わせる措辞に圧倒される一首である。

出会いの四月から、新たな恋が生まれる予感が、五月という眩しい季節に向かわせる。咲こうとする芍薬の、その匂やかなまだ見ぬものへの期待感、青春の一回性をも思わせる。それにしても「四月が恋する五月」とは詩人の目にして、心憎いフレーズだ。

・料理酒を買えば未成年でないというパネルをタッチせよと言われ

本田 民子

レジで支払いをする際、年齢確認商品というものがある。料理酒もみりんもアルコール成分が含まれているため、年齢確認ボタンへのタッチが求められる。この私が未成年に見えますか、とでも言いたげな作者だが、法令は守らなければならぬ。事実のみを述べて、店側の融通の利かない対応を作者は揶揄したくなったのだ。

作品二、三 十首選



(七月号作品から)

高 島 憲 子 選

・瀬戸内の穏しき日差しを吸い取りて人間魚雷「回天」黒し

小笹岐美子

瀬戸内とあるので、山口県周南市の回天記念館での着想であろう。若い回天搭乗員達の訓練、出撃がここであり、実物大の人間魚雷の展示がある。黒々と長い鋼鉄の画像からだけでも、当時の戦争の狂気と残酷さが迫る。日差しを浴びる、ではなく「吸い取りて」と感じたところが作品の眼目。穏やかな日差しには、現代人が満喫している平和、という暗示もあるう。それを吸い取るような魚雷の黒色。結句、黒し、が重く響く。この「黒」に、兵器の陰惨さ、忘れてはならない事実、罪の塊の重さ、戦争への憎しみが込められている。信号機はLEDへと替えられて軽くなりしよ春の景色が

小原 裕光

日ごろ見慣れている信号機。ある日、急に薄っぺらになり、あれ、と思うことがある。いつの間にかLEDに替えられていたのだ。そこから作者は、春の景色そのものが軽くなったと感じた。詠めそう詠めない鋭い発見である。易しくシンプルに詠み、冴えた感覚が光る。

・無器用ならば無器用なりに生きて行く桜吹雪のあと追いかけて

加瀬喜美江

桜は、業平、西行、芭蕉…を例に出すまでもなく、昔から様ざまに人の心を掻き立ててきた。それが吹雪いているというだけで、高揚してくるのは現代人もしかり。桜の咲き方、散り方から、どうしても、(命)に思いが至る。作者は桜吹雪を追いながら、無器用でいい、と自分の生をいとおしみながら、あるがままに行こうと思うのだろう。プキ、プキ、フプキの韻律にも、引きつけられた。

・世の進化に対話型A-I出現すやがては逝かむ黄泉路教へよ

後藤 彌生

対話型A-Iという、最近の話題に注目して意欲的。A-Iは人の様ざまな話しかけ、問い合わせにも上手に答えてくれるらしい。ならば、やがて私が逝くであろうときに、黄泉路を教えなさいよ、と詠む。ドキッとさせる結句で、皮肉や批判を込めている。世の進化に…出現すという説明を省けたなら、よりシャープな作品になったろう。表記で気になった点を。やがては逝かむ、が、四句切れならばこのまま。やがては行く黄泉路、を教えよ、ならば、黄泉路に行く、ですでに逝く意味になるので。ここは〈行〉が適切であろう。

・柿の葉の次第に大きくなり始め物音あらぬ春の昼なり

小林ますみ

春先のさみどりの柿若葉が、色濃く大きくなってゆく。その始まりの頃の描写。殊更な主張はなく、春の昼の静かさそのものを詠む。柿の葉が大きくなる、しかも物音をさせずに、と読んでもみたくなくなり、自然の中の時の過ぎゆきが、読者をゆつたりとした気持ちにさせる。

・夫の用ばかりで過ぎたる夫の留守空気のような夫とは言えず

三浦 伶子

川柳のような、びりつと辛口な読みぶりが面白い。空気のような、とは、存在感が薄い人の場合をいい、夫に対して使われる場合が多そうだが、逆に言うなら、気遣い無用の気楽な間柄。この御夫君、自分の出がけに「これをやるといってくれ」と妻に頼むのか。あるいは、夫の留守こそ羽を伸ばしたいのに、家事は夫に聞かわることばかり、という妻の溜息か。この一首で憂さが晴れたのでは。

・溝蓋の穴を残して散り積もるさざんか赤さざんかの路地

三神 進

散歩の途中に出会った光景だろうか。アスファルトの路地一面に、山茶花の赤い花びらが散り積もっている。溝蓋の穴のところだけ、ぽっかり黒く残っているのだろう。叙景は難しいものだが、この作者はうまく言い得た。さざんか赤し、と終止形にして一回切り、改めて、さざんかの路地、とゆつたり歌いおさめる方法もある。ここでは、赤き、と連体形にし、上の言葉がすべて結句の路地にかかる。このさざんかの繰り返しの韻律と作者の氣息を大事にしたい。

・面会はオンラインにて夫の顔半分映して五分が終る

安田 恵子

連作より、入院は夫側であることがわかるが、独立の一首として読む時、作者側と解釈することもできる。いずれにしても、この長いコロナ禍の延長から、いまだに面会には制限があり、このようなオンラインが日常化している。画面上、連合いの顔が半分しか映らない、一回の制限が五分等、まさにリモート面会の現実を活写。貴

重な時事詠。過去となくとも時代を映した意義深い作品となる。

・メモ帳も本もスマホも持たず来てフードコートは知らぬ間に春

川久保百子

いつもなら、メモ帳、本、スマホなどを持ってくる気に入りのフードコートなのであろう。持たずに来たか偶々忘れたか、どちらでも良いが、三句と結句が響き合っている。この間までは寒かったのに、今日は春の雰囲気だと気づく。客の服装やメニュー、レイアウト、あるいは、今日の作者の内面のせいだったかもしれない。

・かすかなるあれは遠雷 クレソンを摘み来て朝の厨に立てば

澤田久美子

朝の厨に摘みたてのクレソンとは、瑞々しく清新な雰囲気。かすかな遠雷に耳を澄ます作者。日常の中に小さなドラマがある。文語を上手く使うことで、些事を詩情のある一首にした。あれは何、遠雷か、という心のたゆたいが一字空けにこもる。キッチンとせず厨としているところにも、作品世界へのこまやかな配慮がある。

・降りるとき貰う時もピツとタツチするカードにわたし把握されてる

能城 春美

口語を駆使し、生活の一場面を軽やかに詠む。スイカ、パスモ、イコカ：様々なカードが、交通機関の利用や買い物にと、オールマイティに使える世の中。結句の《把握》で一首が立ち上がる。どのくらい乗ったか、いくら使ったかは残高でわかる。不足すれば警告音が高々と鳴り、撥ねられてしまう。まさに把握されている。無機質のカードの擬人化に皮肉がある。把握されおり、といった文語調でなく、わたし…：されてる、というまさに心中の眩き。口語が生た。

村野次郎への旅 (161)

大正期の「香蘭」(二十二)

千々和 久 幸

前号に引き続き「香蘭」大正十五年十月号の「前月歌壇合評」を読んでいこう。今月の評者は杉浦翠子、村野次郎、橋本政一、酒井廣治である。

「日光」

(一) ひそまれる夜の空氣に唸りたる何かの蟲
がつき墜ちしおと

(二) いつまでもわれは掴みて昆蟲の肢のあが
きをむなしく見をり 大熊 信行

(翠子) (一)の「唸りたる」は「つつ」位の意味なんですか、「つき、墜ちしおと」の「つき」私には不明。「つきあたる」と云ふことばもある。「つき落す」と云ふ言葉もある。けれども「つきおちし」は私の淺學には推量が出ません。

(二)のお歌の意味は分りますが、「いつまで」も安價です。「むなしく見をり」は月並です。(二)のお歌は何か異状なものに觸れて居て、

その表現を失敗に終り、(二)は概念的で、清新な生命を見出すことが出来ません。

(次郎)氏の歌は私はさうよく讀んではゐないが今一轉期にあるのではないかと思ふ、何か力強くにじみ出さうとして居る努力が見える、随分感心出来ない所もあるのであるが、何物かを建設しやうとする其努力に好意が持てるのである。尚氏は才人である。句々の微細なる缺點についても充分承知して居るのであらう。只其才に任せ、興味に乗じ、きわどいことをやる所に私の氏に對する期待と危慮がある。

(一)は「ひそまれる」、「唸りたる」のれる、たるは、一首を統一させる周到なる注意を缺いた結果である。「何かの蟲」はガムシヤラの一端であり、「つき墜ちし」は心的表現のエンフアシスである。尚上句一體も無雜作であつて完全なる表現とは云はれまい。これだけの

氣に入らない所がありながら、何うしても捨てられない。何處かにひたぶるな心が見えるからである。(二)上句聊か説明に入つて居るかも知れない。昆蟲も只だ昆蟲だけでは不安である。油蟲なら油蟲と云つたら更に如實にならう、むなしく見居りが中心であるがこの行方を示して居る氏は斎藤茂吉氏の境地に共鳴點を見出して居ると思ふ。

「吾妹」

(一) 夕かける庭の面あつし紫陽花に來てをと
まれる蜂はくま蜂

(二) 熊蜂のうなりを聞きて縁にをり暑さにま
けて瘦せたるらしき 楠田 敏郎

(翠子) (一) 結句の「蜂はくま蜂」くま蜂の説明ですね。蜂はみつばちではない、くまばちですよ、かう斷られても私には一向有難くありません。寫生派が絶対に説明の體を否定したことは偉大な功績であつたが、今日その寫生派に倦怠を覺えて來た結果が時々かう云ふ表現に出る。

(二)「瘦せたるらしき」、自分の鉢のことでせうが、自分の肉體に對してかうした想像風に出なければならぬのでせうか。

（次郎）杉浦氏の（二）の結句は説明であると言ふのは同感である同語を重ねた所に一種の興味を見出したのであらうが、まだ浅い。断り過ぎて餘情が出ない、いい氣なものである。とは云へこの一首はよい味があるので、歌はんとする作者の心は同情出来る。ただ蜂にどうして斯う異状な興味を持つたかが疑問なのである。更に又上句と下句の緊密性をもつとあつてもいい様に思はれる。

（二）に對して私の日光九月號に「この夏は瘦せしと思ふさ庭への午後の反射をさびしみにつつ」と云ふのがある爲か、杉浦氏よりも同情が持てる。杉浦氏の如何なる故に想像風に出たかと云ふことは楠田氏にしても私にしてもよく考へて見る必要がある。直情の杉浦氏のは否か諸かに事を早く定めなければ、じれつたいと云ふ心なのである。私としては、さうあけすけにやられてはやり切れないと云ふ心なのである。このことは茲で一寸詳しくは書けないが「瘦せた様な氣がするな」と腕をさすつて居る位の氣持である。勿論楠田氏と私との歌は同じではないのであつて杉浦氏が私の歌に對してそれだけの疑問を持つか何うかが判らないのであるけれども。

○ 「白樺」

（一）わが庭に夏繁りせる群小竹の幹は黄にして葉は青きかも

（二）細々と眞直ぐに生ひて聊かの撓みもみせず矢の如き小竹 對島 完治

（翠子）（一）楠田さんのお歌と同じやうに、これも説明であることが不思議です。作者はこの竹は變たな、幹が黄色くて葉が青いよ、かう思つたところを歌にしたのでせうけれど、子供だつてその竹を見たらその位の考は浮ぶので、やはり私にはつもらなく思ひます。かう云ふ感じはもうすこし詩化さしたいと思ひますがいかゞ。

（二）の方もその表現が冗漫に流れてあります。そして心持ばかりが先きに出てゐて、竹の寫生に遠ざかつてゐます。心持は殆ど萬人共通なんですから、云はなくとも残念ではありませぬ。調子も散文的であります。結局、多辨な歌です。

（次郎）杉浦氏の批評は面白い。幹は黄で葉は青いと云ふことが夏繁る群小竹のはなはだし特性であつたなら、この一首はもつと詩味を帯びて來るであらう。それを葉がどうなつ

たと云ふのでなく、單に青いと云ふだけであるので、「犬が西向けば尾は東」と云ふ地口を思ひ浮かばさせる損があるのであるまいか。同じ様なことを云つて居るのであるが「薔薇の木に、薔薇の花さく、何事の不思議な詩を見出すのは如何なる理由であるかよく考へて見たいと思ふ。

（二）が冗漫で説明的であると云ふ杉浦氏の批評の意がよく判るそして斯うまで云ふと一言にたどたどしさが出て來る。一つことを、「眞直に生ひて」、「撓みもせず」、「矢の如き」と三重にも説明して居るが、それは言葉だけであつて小竹の眞直ぐな芽えは如實には現はれては居ない。心で歌はず、言葉を積み重ねてある爲め、折角の小竹が却つて曲りくねつて響いて來る様な氣がする。

この前月歌壇合評は「香蘭」誌の呼び物だつたのだらう。並み居る歌壇の中心的な作家を杉浦翠子が撫で斬りにし、それを村野次郎師がやんわり抱え込んで取りなす呼吸が絶妙である。「香蘭」は「世の時流なるもの」（『樗風集』）の眞つ只中に居たのである。